

漢法苞徳塾資料	No. 213
区分	診察論・脈診
タイトル	難經の脈学について・補足
著者	八木素萌
作成日	1990.01 経絡治療学会発表：追加

「難經の脈学について」の中で既に論じたが、脈の意味する所を症候によって確認するという問題の部分の、検討はなお不十分であるので補足する。

1. 九難に「数～腑～熱～陽」・「遲～臟～寒～陰」との記述がある。これに対応して、

「重陽ハ狂 重陰ハ癲 脱陽ハ鬼ニ見ヒ 脱陰ハ目盲ス」(20)、

「五臟和セザルトキハ九竅通ゼズ 六腑和セザルトキハ留結シテ癰ヲ為ス」(37)、

「～病寒エヲ得ルコトヲ欲ッシ 人ニ見ウヲ欲ッスル者ハ 病腑ニ在ルナリ 病温ヲ得ルコトヲ欲ッシテ 人ニ見フコトヲ欲ッセザル者ハ 病臟ニ在ルナリ～腑ハ陽ナリ 陽病ハ寒エヲ得ルコトヲ欲ッシ 又人ニ見フコト欲ッスルナリ 臟ハ陰ナリ 陰病ハ温ヲ得ルコトヲ欲ッシ 又閉戸シテ独リ処ルコトヲ欲ッシ 人声ヲ聞クコトヲ悪クムナリ～」(51)、

「～臟病ハ止マリテ移ラズ 其ノ病其ノ処ヲ離レズ 腑病ハ 仏ト噴響シ 上下ニ行グリ流レテ居処ニ常アルコト無シ」(52)、

「～積ハ陰気ナリ 聚ハ陽気ナリ 故ニ陰ハ沈ミテ伏シ 陽ハ浮シテ動ズ～」(55)、

「～胃泄ハ飲食化セズ色黄ナリ 脾泄ハ腹脹満シ泄注シ 食スレバ嘔シ吐逆ス 大腸泄ハ食已ミテ窘迫シ大便ノ色白ク腸鳴シ切痛ス 小腸泄ハ洩レテ便ニ膿血アリテ少腹痛ム 大瘕泄ハ裏急後重シ数々圜ニ至リテ便スルコト能ワズ 茎中痛ム～」(57)、

「～狂疾ノ始メテ発コルヤ臥スコト少ナクシテ飢エズ自ラ高賢ナリ 自ラ辨智ナリ 自ラ倨貴ナリ 妄リニ笑イ好ンデ歌樂シ 妄行シテ休マズ 是レナリ 癲疾ノ始メテ発コルヤ 意樂シマズ僵仆シ直視ス～」(59)

など等と陰陽の症候論を記述している。先に述べた様に、症候について記述している難は20の難に及んでおり、その字数は約4,200字である。これは十六難の、脈がA臓を意味していても、病証がA臓の病を意味するもので無いならば、A臓の病と診断を下してはならないと言う記述から当然の事であろう。病証が主語であって脈象は補語であると言う関係としている認識と、八十一難の補瀉の決定は脈に従うのでは無く、病そのものの虚実に従うべきであるという主張とも、首尾一貫している。これは、病と言うものは脈象と病証とに矛盾が在るものであって、その矛盾関係が、相生的なものであるか、相剋的なものであるかによって、病の逆順を判断すると言う、難經の基本的な診断方法論が貫かれた論理構成を示しているものであろう。

2. 七十四難に「五臓一タビ病メバ 輒ワチ五色有り 仮令エバ肝病色青キ者ハ肝ナリ 臊臭ノ者ハ肝ナリ 酸ヲ喜ム者ハ肝ナリ 呼ブコトヲ喜ム者ハ肝ナリ 泣スルコトヲ喜ム者ハ肝ナリ 其ノ病衆多ナリ 尽ゴトク言フベカラザルナリ 四時ニ数有り而シテ春夏秋冬ニ并ビ係ル者ナリ～」とあって、四十九難の記述と呼応する。そして三十四難の「声・色・臭・味・液」の記述、四十難の耳の聴覚・鼻の臭覚の作用する機構が五行の剛柔陰陽の相互作用にあると言う記述などは、十三難の記述との関連で、五臓機能を象徴する生理現象としての「声・色・臭・味・液」の診断論的な意味付けが明らかにされている。四十九難の記述は明らかに「色の変動は風邪」・「声の変動は寒邪=体の上部より体を侵襲する肺<金>性の邪」・「臭の変動は熱邪」・「味の変動は土性の邪」・「液の変動は水性=体の下部より侵襲する涼冷な腎<水>性の邪」などを意味すると言う認識を示している。
3. 脈診によらない経脈変動の確認方法の問題は、五臓六腑・陰陽・積聚・虚実などについての記述と比較すると曖昧であると言わねばならない。『絶証』の記述はあるが、経脈病証の記述が無いのである。奇経の病証は記述されているが正経については記述されていない。治療上経脈を重んじなくてはならない事を指示するものと解釈出来る記述は、
- 「～各々其ノ経ノ所在ヲ以テ病ノ逆順ヲ名フナリ」(4)、
- 「～審ラカニシテ之レヲ刺スモノナリ」(18ノ中段)、
- 「～脈ニ随ヒテ之レヲ言ウ～」(19)、
- 「明ラカニ終始ヲ知りテ陰陽定マルトハ何ノ謂ヒゾヤ? 然ルナリ 終始ハ脈ノ紀ナリ～終トハ三陰三陽ノ脈絶ナリ 絶スルトキハ死ナリ 死ニハ各々形アリ 故ニ終ト曰フナリ」(23)、
- 三十七難の前段と中段、
- 「～各々其ノ経ノ所在ニ随ヒテ之レヲ取レ」(58前段)、
- 「～所謂迎随トハ 榮衛ノ流行 経脈ノ往来ヲ知ルナリ～調気ノ方ハ必ず陰陽ニ在リトハ 其ノ内外表裏ヲ知りテ 其ノ陰陽ニ随ヒテ之レヲ調エルナリ 故ニ曰ク調気ノ方ハ必ず陰陽ニ在リト」(72)、
- 「～其ノ陽気不足シ陰気有余ナレバ 先ズ其ノ陽ヲ補シテ後其ノ陰ヲ瀉スベシ 陰気不足シ陽気有余ナレバ 先ズ其ノ陰ヲ補シテ後其ノ陽ヲ瀉スベシ榮衛ノ通行ハ此レ其ノ要ナリ」(76)、
- 「～迎エテ之レヲ奪フトハ其ノ子ヲ瀉スナリ 随ヒテ之レヲ濟クトハ其ノ母ヲ補スナリ～」(79)
- など等であると言うことができると思うが、脈診以外の方法による経脈変動の確認問題としての記述はどうであろうか? 他の病証確認方法の記述の様な具体的記述がどうも見当たらない。僅かに三十七難に前段の「～五臓和セザレバ九竅通ゼズ 六腑和セザレバ留結シテ癰ヲ為ス～」に続く中段の記述「～邪六腑ニ在レバ陽脈和セズ 陽脈和セザルトキハ氣之レニ留マル 氣之レニ留マルトキハ陽脈盛ントナル 邪五臓ニ在レバ陰脈和セズ 陰脈和セザルトキハ血之レニ留マル 血之レニ留マルトキハ陰脈盛ントナル～」との記述ぐらいのものである。これは、陽邪は陽経に「氣」の滞留を現象させ、陰邪は陰経に「血」の滞留を現象する、従って陽経での「氣」の「邪実」は脈象にも「盛ん」=実を現わさせる事となり、陰経での「血」の「邪実」は陰の脈象にも「盛ん」=実を出現させる事となる、と言う指摘である。前段の記述との関連で言えば、腑病は「陽」のものである「氣」を陽経で「留結」=鬱滞せしめるから体表の陽の分=衛分・気分の熱鬱の極みである『癰』

となるが、臓病は「陰」のものである「血」を陰経で「留結」＝鬱滞せしめるから体内の陰の分＝榮分・血分での「静・沈・寒」を来すので五臓の「竅」を塞ぐ次第である、こう言う記述である。

4. この問題で疑問が残るのは、五臓についても六腑についても、鋭い病証記述があるのに、経脈病証の記述が見当たらない点である。僅かに二十三難の「終始」論に続いて二十四難に三陰三陽の絶証が記述されるのみで、然も六陰経脈はそれぞれについて論述しているが、六陽経脈は一括して「～陰陽相いに離るれば即ち腠理泄す 絶汗乃ち出でて 大なること貫珠の如し 転と出でて流れざれば即ち氣先ず死す～」と記述しているだけである。六陰経の死症については各経脈の基本的生理作用との関連で説明しているが、経脈病証論としては記述されない、これはどう言う事なのであろうか。この点『靈枢』経脈第 10 の記述とは対照的な記述形式である。中医学では「辨証論治」の問題で、臟腑病証・四時病証・衛氣榮血病証・六経病証〈傷寒論の三陰三陽の辨証〉などと『『経脈篇』の経脈病証』との関連問題の議論もある、然しまだ未解決な点である。この点は、「傷寒論」的な「三陰三陽」の認識が、経脈論の三陰三陽の認識との相互関係は如何ようになっていくかを、臨床を通じて調査し確認して行かなくてはならない問題である。『素問』熱論第 31 の三陰三陽の論の延長線上に「傷寒論」の三陰三陽論が、一層発展させた形で構築されたものである事は、既に明らかにされているのであるから、鍼灸医学的な臨床治療による検討・研究がなお不十分な点なのである、こう言う未解決さに過ぎないのである。既に『傷寒論鍼灸配穴選注一単玉堂＝人民衛生出版社』が在って、かなりこの問題の臨床的検討が行なわれているが、これのみでは不十分であり臨床的な追試と異なった配穴方法による検討も必要であろう。この検討が進むと、「経脈病証論」の位置付けが明らかになるであろう。何れにせよ『難経』には奇経と臟腑病証関連の病証論は記述されているのに、経脈病証論の記述が無いと言う事は様々に考えさせられる問題である。大きな謎であり宿題であると言えよう。
5. 『難経』は奇経の病証には基本的には「刺絡」で対応していることは、二十八難の「～聖人溝渠ヲ図リ設ケタルニ比シテ溝渠ハ満溢シテ深湖ニ入ル故ニ聖人モ拘通スルコト能ワズ 而シテ人脈ノ隆盛スレバ八脈ニ入りテ環周セズ 故ニ十二経モ拘ワルコト能ワズ 其レ邪氣ヲ受ケテ蓄スレバ腫熱スニ之レヲ射スモノナリ」の記述から明らかである。陽＝腑＝熱＝氣と言う『難経』の認識は「六腑和セザレバ留結シテ癰ヲ為ス」「邪六腑ニ在ルトキハ陽脈和セズ 陽脈和セザレバ氣之レニ留マル～」(37) との関連において二十三難の記述を見れば「癰」と「腫熱」と言う用語には、病証認識においてかなりオーバーラップしている様に思われてならないのである。そしてこの事は「絡脈」論の問題でも『素問』『靈枢』段階のものとの相違が在ったのではないかとも思わせるものである。と言うのは「満溢」して「八脈ニ入りテ環周セズ」「其レ邪氣ヲ受ケテ蓄スレバ腫熱ス」と言うのは『靈枢』血絡論第 39 の「奇邪ニシテ経ニ在ラザル」者が「血絡」であるとの認識、そして更に「陰陽相得テ合シテ痺ヲ為ス者ハ 此レ内ニ経ニ溢レテ外絡ニ注グナリ 是ノ如キ者ハ陰陽俱ニ有余ニシテ 出血多シト雖ドモ虚ス能ウナキナリ～」の記述と似通っているが、『難経』は主に奇経の問題として扱っていると見られるからである。

「～経脈ハ血氣行グラシ陰陽ヲ通ジテ以テ身ヲ榮スル者ナリ～別絡十五ハ皆其ノ原ニ因リテ環ノ端無キガ如ク転相シ漚漚シテ寸口人迎ニ朝ヒテ以テ百病ニ処シテ死生ヲ決スルナリ」(23)

「～経二十二有リ絡二十五有リ凡ソ二十七氣ハ相ヒ随イテ上下ス何ゾ独リ経ニ拘ワラザルヤ 然ルナリ 聖人溝渠ヲ図リ設ケテ水道ヲ通利シ以テ不然ニ備フモ 天雨降下シテ溝渠溢レ満ツ 此ノ時ニ当リ 霧霈ト妄行スレバ聖人モ復タ図ルコト能ハザルナリ 此ノ絡脈ノ満溢ハ諸経モ復タ拘ワルコト能ワザルナリ」(27)

この「絡」の記述は既に引用した二十八難の記述に見られる「奇経脈」の表現とは区別し難い。然し設問からすれば十五絡を論じているのであるから、『内経』にある「浮絡」「孫絡」「血絡」「絡」や後に「筋絡」と言われているもの等と「十五絡」や「奇経脈」などを整合的に把え直そうとしている可能性もあるのかも知れない。『内経』では「繆刺」と「絡」の問題も含めて「絡脈論」は雑然として未整理の俣と言う印象であるが、これに『難経』の著者は手を付けようとした形跡が『難経』の経脈論に見て取るのは解釈のし過ぎであろうか。

6. 「奇経」と「十五絡」の記述から脈状論との関係を考えると三十七難と二十三難・二十七難・二十八難・二十九難等の記述とを考えあわせれば脈状は陽脈の実に傾くと把握しているかの如くである。「十五絡」もほぼ同様と解されるが「奇経」の様な病証記述が無いので「陽経」の気実「陰経」の血実を診ることで確認すると言う事であろうか。いずれにせよこの辺りの記述は殆ど要素的であって、臨床的には後代の展開に俟つほかは無きようである。『難経古義』に「蓋し奇経は諸十二経に比し皆絡なり故に知る任督の外二の所属の穴も亦諸絡穴と同治」と注しているも未だ明確ではない。

1989・12・30 攔筆